

# 農地等の利用の最適化の推進に関する指針

令和8年3月11日

亀山市農業委員会

## 第1 基本的な考え方

農業委員会等に関する法律（昭和26年法律第88号。以下「法」という。）の改正法が平成28年4月1日に施行され、農業委員会においては「農地等の利用の最適化の推進」が最も重要な必須事務として、明確に位置づけられた。

本市においては、平地と中山間が混在しており、米や野菜、茶など様々な作物の栽培が盛んであるが、現状は、農業従事者の高齢化や後継者不足に加え、資機材や人件費などの生産コストの高騰及び、それに伴う販売価格への転嫁課題による農業生産所得の不安定さの課題もあり、農家の減少とともに産業としての生産基盤の弱体化が進行している。

このような中、農業委員会として、遊休農地等の発生防止・解消、担い手農家への利用集積、新規参入の促進を積極的に推進していく必要がある。

以上のような観点から、農業委員と農地利用最適化推進委員が互いに連携し、地域の強みを活かしながら、活力ある農業・農村を築くため、法第7条第1項の規定に基づき、亀山市農業委員会の指針として、具体的な目標と推進方法、目標の達成状況に対する評価方法等を以下のとおり定める。

## 第2 具体的な目標、推進方法及び評価方法

### 1. 遊休農地等の発生防止・解消について

#### (1) 遊休農地等の解消目標

	管内の耕地面積 (A)	遊休農地等の面積 (B)	遊休農地等の割合 (B/A)
現状 (令和8年2月末)	1,690ha	876.04ha (内訳) 緑 遊休農地：107.84 ha 黄 遊休農地：117.52 ha 荒 廃 農 地：650.68 ha	51.83%
令和10年度目標 ※3年後 (令和11年3月末)		859.03ha	50.83%

目標値の考え方：前回の単年度解消目標面積が5.67haであることから、それを引き続き目標面積とする

(2) 遊休農地等の発生防止・解消の具体的な推進方法

① 農地の利用状況調査の実施について

- 農地法（昭和27年法律第229号）第30条第1項の規定による利用状況調査（以下「利用状況調査」という。）の実施について協議・検討し、調査の徹底を図る。

なお、従来から農地パトロールの中で行っていた、違反転用の発生防止・早期発見等、農地の適正な利用の確認に関する現場活動については、利用状況調査の時期にかかわらず日常的に実施する。

- 利用状況調査の結果は、速やかに「農地台帳システム」に反映し、農地台帳の正確な記録の確保と公表の迅速化を図る。

② 農地中間管理機構との連携について

- 農家の意向を踏まえた農地中間管理機構への貸付け手続きを行う。

(3) 遊休農地等の発生防止・解消の評価方法

遊休農地等の発生防止・解消の進捗状況は、遊休農地等の割合により評価する。

単年度の評価については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」に基づく「農業委員会の農地利用の最適化の推進の状況その他事務の実施状況の公表」のとおりとする。

2. 担い手への農地利用の集積・集約化について

(1) 担い手への農地利用集積目標

	管内の耕地面積 (A)	集積面積 (B)	集積率 (B/A)
現状 (令和8年2月末)	1,690ha	356ha	21.06%
令和10年度目標 ※3年後 (令和11年3月末)		373ha	22.07%

目標値の考え方：令和3年度の担い手への集積面積の実績が373haであるため。

(参考) 担い手への単年度集積目標面積を約5.6haの実績以上とする。

(2) 担い手への農地利用の集積・集約化に向けた具体的な推進方法

① 「地域計画」のブラッシュアップ(改善)について

- 農業委員会として、地域(1集落又は数集落)ごとに人と農地の問題を解決するため、10年後の農業の在り方と農地利用の将来像を描く「地域計画」のブラッシュアップ(改善)に主体的に取り組む。

② 農地中間管理機構等との連携について

- 農業委員会は、市町村、農地中間管理機構、農協等と連携し、(ア) 農地中間管理機

構に貸付けを希望する復元可能な遊休農地、(イ) 経営の廃止・縮小を希望する高齢農家等の農地、(ウ) 利用権の設定期間が満了する農地等についてリスト化を行い「地域計画」のブラッシュアップ（改善）、農地中間管理事業の活用を検討するなど、農地の出し手と受け手の意向を踏まえたマッチングを行う。

### ③ 農地の利用調整と利用権設定について

- 管内の地域の農地利用の状況を踏まえ、担い手への農地利用の集積が進んでいる地域では、担い手の意向を踏まえた農地の集約化のための利用調整・交換と利用権の再設定を推進する。

また、中山間地域等の農地の区画・形状が悪く、受け手が少ない又は受け手がいない地域では、農地中間管理機構による簡易な基盤整備事業の活用と併せて集落営農の組織化・法人化、新規参入の受入れを推進するなど、地域に応じた取り組みを推進する。

### (3) 担い手への農地利用の集積・集約化の評価方法

担い手への農地利用の集積・集約化の進捗状況は、農地の集積率により評価する。

単年度の評価については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」に基づく「農業委員会の農地利用の最適化の推進の状況その他事務の実施状況の公表」のとおりとする。

## 3. 新規参入の促進について

### (1) 新規参入の促進目標

	新規参入者数
現状 ※累計 (令和8年2月末)	12 経営体
令和10年度目標 ※3年後 (令和11年3月末)	15 経営体

目標値の考え方：新規就農者を年平均1経営体以上確保する。

### (2) 新規参入の促進に向けた具体的な推進方法

#### ① 関係機関との連携について

- 都道府県・全国の農業委員会ネットワーク機構、農地中間管理機構等と連携し、管内の農地の借入れ意向のある認定農業者及び参入希望者（個人、法人）を把握し、必要に応じて現地見学や相談会を実施する。

#### ② 新規就農フェア等への参加について

- 市町村、農協等と連携し、農業委員や推進委員が新規就農フェア等に積極的に参加することで新規就農希望者の情報収集に努め、新規就農の受入れとフォローアップ体制を整備する。

### ③ 企業参入の推進について

- 担い手が不足している地域では、企業の農業参入も地域の担い手確保の有効な手段であることから、農地中間管理機構も活用して、積極的に企業の参入の推進を図る。

### ④ 農業委員会のフォローアップ活動について

- 農業委員及び推進委員は、新規参入者（個人、法人）の地域の受入条件の整備を図るとともに、後見人等の役割を担う。

### (3) 新規参入の促進の評価方法

新規参入の促進の進捗状況は、新規参入者の数により評価する。

単年度の評価については、「農業委員会による最適化活動の推進等について」に基づく「農業委員会の農地利用の最適化の推進の状況その他事務の実施状況の公表」のとおりとする。

## 第3 目標年度及び指針の見直し

### 1. 目標年度

本指針の目標年度は令和10年度とする。

### 2. 指針の見直し

本指針は、その推進を確実なものとするため、必要に応じて目標、推進方法、評価方法を検討し、見直しを行う。